

共助研 特別声明

大震災犠牲者のご冥福をお祈りし、早期復興を祈念しての呼びかけ

内山 節さんからの呼びかけに呼応しよう！

趣旨

このたびの東日本大震災被災地へのお見舞いを申し上げ、犠牲者のご冥福をお祈りするとともに早期復興を祈念して止みません。すべてにおいて厳しい状況が待ち受けていることでしょう。深く心痛を覚える中で、私たちにとって、不幸の中の幸いは、私たち日本人の高貴な魂は失われていなかったことを確認させていただいたことでもあります。そして、これある限り、きっと日本は蘇る、という確信を持てるに至ったことでもあります。

大災害は、東日本のみならず、全国、全世界的に大きなインパクトを与えるものでした。あらゆる人びとが何らかの立場で関係しあい影響しあっておられることでしょう。

私たちは研究会は、九州の農山漁村部と都市部とが相互に助け合う「共助のネットワークづくり」を目的として設立されましたが、この目的を推進する力の源泉は、なんといってもこのたび示された、助け合いの心、自己犠牲の精神、我慢の心、といった日本精神であろうと確信いたします。本会はずっと最初にその心を学ばせていただきました。

「悲しみは共有できないが、寄り添うことはできる」(山折哲雄)。加えて「学ぶこと、祈ることはできる！」本会も心的なレベルで深いインパクトを受け、これを原点として活動を進めることを再確認したいと願っています。それだけに内山 節さんの呼びかけには深く共感を覚え、本会として広く呼びかけることと致しました。ご理解のほどよろしくお祈り申し上げます。

説明

ご存知のように、内山節氏は、群馬県上野村に居を構え、長年、地域共同体研究を進めておられる哲学者で、我々の愛読書 雑誌「かがり火」の編集者でもあります。以下をご一読いただき、震災で亡くなられた方への追悼を多くの方に広げていただければ幸いです。

東日本大震災で亡くなった人々を、みんなで供養しよう

亡くなられた方々の冥福を祈る日をみんなで作りだすことを呼びかけますー

最初の呼びかけ人・内山 節

日時 2011年(平成23年)4月24日日曜日

この日にそれぞれの場所、それぞれの方法で亡くなられた方々への冥福を祈りましょう。また12時正午にはみんなで祈りを捧げたいと思います。

方法

ご自身の信仰をおもちの方はその方法で、また他の方々はそれぞれが思いついた方法で。被災地の方角を向いて手を合わせる、仏壇などをおもちの方はお線香を上げる、近くのお寺、神社、教会などに集まり祈りを捧げる、ご自宅に思い思いのデザインの半旗を掲げる、追悼の集まり、コンサートなどを開く、……方法は自分がよいと思う方法で、自分のできる方法で。国葬のような儀式にするのではなく、全国津々浦々でみんなが送る日にしたいと思います。

東日本大震災は私たちのなかに驚き、恐怖、悲しみとともに、自分自身もまた「支え合う社会の一員でいたい」という強い意志をも生みだしました。皆様もそれぞれの場所、それぞれの方法で、直接、間接的な被災者への支援の活動をおこなわれていることと思います。私たちの役割はこれからも持続的な支援活動を続けながら、被災地の復旧、復興に協力していくとともに、この直接、間接的な活動をとおして社会とは何か、社会はどうあるべきか、暮らしや労働をどう変えていったらよいのかなどを捉え直し、日本の社会を再生させていくことだろうと思います。

その意志を示し、未来への歩みをすすめるために、みんなで東日本大震災で亡くなった方々を供養する日を設定することを呼びかけます。

古来から日本の社会には、災害や「戦」などの後に亡くなられたすべての方々の冥福を祈り、死者供養をする伝統がありました。「戦」の後には敵味方を区別せず供養しました。またそのときには人間だけではなく、巻き込まれて命を落としたすべての生き物たちの冥福を祈りました。さらに災害の後には、大地が鎮まることをもみんなで祈りました。そうすることによって、悲劇に巻き込まれていった生命への思いを共有し、ひとつの区切りをつけ、次の歩みに向かう入り口を作りだしてきました。

この度の大災害で亡くなられた方々に対してはすでにご遺族の方々などの手によって、精一杯の供養がおこなわれたことだろうと思います。しかしその一方でご家族が全員亡くなられるなどして、誰にも送ってもらうことができないでいる人たちもおられる

と思います。そのような方々に対してはもちろんのこと、すでにご遺族の方々などによって供養された人たちに対しても、みんなで追悼、供養してあげようではありませんか。そうすることによって、これからの私たちの決意をも示したいと思います。

この案内を受けられた方は、ご友人、お知り合いなどに転送し、この呼びかけを伝えてはいただけないでしょうか。またホームページ、さまざまなSNSなどでも呼びかけ合うとともに、供養の方法を提案していただければ幸いです。お寺、神社、教会などにも呼びかけ、私たちはこの災害とともにこれから生きていくことを確認したいと思っています。

亡くなられた方々を十分に追悼することなく、未来を語ることに私はためらいを感じます。ここからはじめませんか。